

# 自由併合における移動の制約

作元裕也

## 1. はじめに

Chomsky (2013, 2015)は、自由併合に基づく画期的な分析を推し進めている。この考え方に基づくると、内的併合と外的併合は、どちらも併合の一種であるため自由に適用することができる(Chomsky (2004, 2008))。しかしながら、もしこの自由併合の考え方が正しいならば、自由併合のもとで、従来提案されてきた移動の制約に関する先行研究の分析を捉え直す必要がある。本稿は Chomsky (2013, 2015)における Agree 適用のタイミングを明確化することにより、基準凍結(criterial freezing)と *wh* 島(*wh-island*)に統一的な説明を与えるものである。

## 2. *wh* 島の問題

一般的に、*wh* 節から要素を取り出すことは禁止され、この制約は Ross (1967)以降、*wh* 島条件として知られている。先行研究では、Chomsky (2000)によって提案されたフェイズ不可侵条件(Phase Impenetrability Condition(PIC))によって、説明が与えられてきた(Ishii (2000), Kanno (2008))。*wh* 島の例である(1a)の派生を(1b)に示す。

- (1) a. \*What do you wonder how Mary repaired? (Manzini (1992: 51))  
b. What do you wonder [<sub>CP</sub> how [<sub>C</sub> [<sub>TP</sub> Mary repaired ~~what~~]]]?

(1b)の埋め込み節では、CP がフェイズとして機能している。CP 指定部は *wh* 句の *how* によって既に占められているため、脱出口(escape hatch)として使用することができない。そのため、PIC により、*what* を当該の埋め込み節から抜き取ることが禁止される。Rudin (1988)は、ブルガリア語は多重指定部構造を許すため、英語とは異なり脱出口が利用可能であり、*wh* 島効果を示さないと主張している。この指定部の数に依拠する説明は、一見、英語とブルガリア語の現象を正しく捉えているように思われるが、ブルガリア語の現象を注意深く観察すると、この分析には問題があることが分かる。実際、Rudin (1988)は、ブルガリア語においても談話連結(D-Linking)がなければ、*wh* 島効果が生じることを観察している(Rudin (1988: 457))。更に、Bošković (2003)はブルガリア語において、*wh* 節から付加詞の抜き取りが不可能であるデータを提示している(Bošković (2003: 33))。よって、Bošković (2003, 2008)が指摘しているように、多重指定部構造を許すブルガリア語においても *wh* 島効果が存在することになる。

この問題を念頭において、自由併合における英語の *wh* 島を含む文の派生を考える。自由併合のもとでは、英語においても多重指定部構造を妨げるものは何もないので、(2b)にあるように *what* は C の補部が転送される前に CP 指定部に移動することが可能である。従って、(2b)の派生を誤って文法的であると予測してしまう。

- (2) a. \*What do you wonder how Mary repaired? (= (1a))  
b. \*What do you wonder {<sub>δ</sub> ~~what~~ {<sub>γ</sub> how {<sub>β</sub>C {<sub>α</sub>John repaired ~~what~~} } } }? (α=<φ, φ>, β=C, γ=<Q, Q>)

よって、(2b)の派生は、事実と反して文法的であると予測されるため、*wh* 島効果にフェイズに基づく説明を与えることができない。したがって自由併合が正しい提案だとすると(2b)の非適格性をどのようにして説明するかが経験的な課題として残されることになる。

## 3. 提案

Chomsky (2013, 2015)は、ラベリングアルゴリズムには素性の一致(agreement)が必要であり、素性一致には素性間の valued と unvalued の関係が必要であると論じている。更に、Chomsky (2019)は、A 要素の場合、Agree 適用のタイミングが素性継承の前であると議論している。本稿は、この示唆から Agree は unvalued feature が valued feature を c 統御する位置にある場合に適用されると主張する。よって、unvalued Q feature を持つ *wh* 句(Chomsky (2015))を伴う A'要素の Agree は *wh* 句が CP フェイズ投射に内的併合した時に適用することになる。

## 4. 分析

### 4.1 *wh* 島の分析

- (3) a. \*What do you wonder how Mary repaired? (= (1a))  
 b.  $\{\gamma \text{ what}_{[uQ]} \{\beta \text{ how}_{[uQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{John repaired } \mathbf{what} \text{ how}\}\}\}\}$   
 c.  $\{\gamma \text{ what}_{[vQ]} \{\beta \text{ how}_{[vQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{John repaired } \mathbf{what} \text{ how}\}\}\}\}$   
 d.  $\{\varepsilon \text{ what}_{[vQ]} \{\delta C_{[Q]} \dots \{\gamma \mathbf{what} \{\beta \text{ how}_{[vQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{John repaired } \mathbf{what} \text{ how}\}\}\}\}\}\}$   
 ( $\alpha=C, \beta=<Q, Q>, \gamma=<Q, Q>, \delta=C, \varepsilon=??$ )

本分析のもとでは、二つの *wh* 句、*how* と *what* が(3b)に示しているように、埋め込み CP のエッジに移動する。(3b)では、unvalued feature が valued feature を c 統御する位置であるため、埋め込みの C と Agree が適用し、(3c)にあるように、unvalued feature が valued になる。もし(3d)にあるように、*what* が主節の CP 指定部位置に移動するならば、 $\varepsilon$  に  $<Q, Q>$  ラベルをつけることができない。なぜなら、*what* の unvalued feature は埋め込み節で既に valued になっているため、主節の C と Agree の適用ができない。故に、(3d)は、主節の C に適切なラベル付けをすることができず、非文法的であると説明することができる。

次に、*wh* 島効果が見られない(4a)の文法性を説明する。Kanno (2008)は、非定形節補文はフェイズを形成していないため、(4a)において、*wh* 句からの *wh* 抜き取りが可能であると説明付けている。よって、Kanno (2008)に従って、(4a)の埋め込み節がフェイズを構成しないと仮定し、その派生を(4b-d)に示す。

- (4) a.  $\text{What}_i \text{ do you wonder } [_{CP} \text{ how}_j \text{ to repair } t_i t_j]?$  (Manzini (1992: 51))  
 b.  $\{\beta \text{ how}_{[uQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{to repair } \mathbf{what}_{[uQ]} \text{ how}\}\}\}$   
 c.  $\{\beta \text{ how}_{[vQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{to repair } \mathbf{what}_{[uQ]} \text{ how}\}\}\}$   
 d.  $\{\delta \text{ what}_{[vQ]} \{\gamma C_{[Q]} \dots \{\beta \text{ how}_{[vQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{to repair } \mathbf{what} \text{ how}\}\}\}\}\}$   
 ( $\alpha=C, \beta=<Q, Q>, \gamma=C, \delta=<Q, Q>$ )

(4d)が示しているように、埋め込み節はフェイズを形成していないため、*what* は直接主節に移動し、主節の C との Agree の適用ができる。従って、 $\delta$  に適切な  $<Q, Q>$  ラベルをつけることができるため、(4d)の派生は文法的となる。

### 4.2 基準凍結の分析

基準凍結 (Rizzi (2006))の例である(5a)の派生を(5b-d)に示す。

- (5) a. \*What do you wonder Bill read?  
 b.  $\{\beta \text{ what}_{[uQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{Bill read } \mathbf{what}\}\}\}$   
 c.  $\{\beta \text{ what}_{[vQ]} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{Bill read } \mathbf{what}\}\}\}$   
 d.  $\{\delta \text{ what}_{[vQ]} \{\gamma C_{[Q]} \dots \{\beta \mathbf{what} \{\alpha C_{[Q]} \{\text{Bill read } \mathbf{what}\}\}\}\}\}$   
 ( $\alpha=C, \beta=C, \gamma=C, \delta=??$ )

(5b)において、埋め込み節にある *wh* 句 *what* が埋め込み CP 指定部位置に移動する。それにより、*what* と埋め込みの C との間で(5c)にあるように Agree が適用し、その unvalued feature に値が付与される。自由併合のもとでは、一致関係が成立した後においても、*what* がさらに移動することが可能である。しかしながら、この移動は(5d)にあるように XP-YP configuration を作り出す。そのため、*what* と主節の C の間における素性共有が必要となるが、既に unvalued feature だったものは、valued になっているため、主節の C と Agree 適用関係に入ることができない。従って、 $\delta$  には、インターフェイスの解釈に必要な  $<Q, Q>$  ラベルをつけることができなくなり、非文となる。

<主要参考文献> Bošković, Željko (2003) "On Wh-Islands and Obligatory Wh-Movement Contexts in South Slavic," *Multiple Wh-Fronting*, ed. by Cedric Boeckx and Kleantes Grohmann, 27-50, John Benjamins, Amsterdam. / Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49. / Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam. / Chomsky, Noam (2019) "Puzzles about Phases," *Linguistic Variation: Structure and Interpretation*, ed. by Lodovico Franco and Paulo Lorusso, 163-168, Mouton de Gruyter, Berlin.